



「体験版short.ver」

## 目次

第一話	清く正しき王妃ソニアは邪魔者	3
第二話	触手に注がれる不妊汁、憎き大臣の解毒汁	13
第三話	国王の愛妻は、兵士たちの女体慰労籠絡係	70
第四話	夫がいるのに。娼婦ジュリア腰振り媚奉仕	127
第五話	背悦に搦め捕られた王妃は手駒	190
ご挨拶		206 (70)

## 主な登場人物

ソニア 二十歳の若妻王妃。芯が強く清らかな性格で、度々オロボイと対立する。

オロボイ 五十代の壮年の男。腹黒い涉外大臣。目障りなソニアの籠絡を決意する。

バロン 五十代の賢王。妻のソニアとは歳の差を越えて愛し合っている。

# 第一話 清く正しき王妃ソニアは邪魔者

アダルトリー魔法王国の玉座の間で、軍役大臣の報告が行われていた。

他部門の大臣も、玉の膝元の円卓につき、じっと耳を傾けている。

「……という状況で、ビート帝国の残存戦力は帝都に集結しております。我が軍は帝都に通じる街道をすべて封鎖し、人も物も通してはおりません」

以上です、と締めくくった彼に、渉外大臣のオロボイが質問を浴びせる。

「我が軍の戦力の状況は？ まだ継戦能力はあるのですかな」

口さがない者からは『ズルいたち』などと呼ばれる顔の五十代は、カイゼル髭の先端を摘み撫でながら返答を待った。

「消耗していることは否めませんが、帝都制圧は十分に可能です」

胸を張り、自信を込めて放たれた言葉は質問者だけでなく、広間の全員の耳に入る。

「了解した……お聞きの通りです、バロン王」

オロボイはゆっくり立ち上がると、玉座に座る王に向かって恭しく腰を折る。

「ご存じの通り、私が王の名で結んだ条約により、近隣諸国は今度の戦には中立であります。が、長引けば付け込んでこないとも限りません。下劣な野心で王の愛国に甚大な被害をもたらした帝国など早々に滅ぼし、以前の安寧を取り戻しましょうぞ」

渉外大臣の言葉に何人かが頷いた。自分も同じ考えだという目で、王を見る。

「つむ……」

玉座のバロン王は、軍務と政治のどちらにも秀でた賢王として知られている。

口ひげと顎髭を蓄えた精悍な顔の壮年男性で、オロボイと同じ五十代なのだが、三十代にも見える若々しさだった。濁りのない瞳は少年のように輝き、放つ声には陰りが無い。

肉体も頑強で屈強だった。魔法が発達し、剣がそれほど盛んではない国であるとは言え、王と肩を並べる使い手は国内には一人もいない。

これまで平和に治めてきた成果も、外国の侵攻をはねのけてきた戦果も申し分のない王は、カリスマ的な魅力を滲ませており、老若男女問わず慕われている。

（どう考えても勝ち戦。王よ、考えるまでもないだろう？ ……さあ、制圧を宣言しろ……帝国を滅亡させると言っただけだ）

忠君の顔で王の返事を待つ涉外大臣は内心、焦れつつも思っていた。

オロボイは帝国の滅亡を望んでいる。

ただし、恨みがあつて渴望しているわけではない。

（滅亡させれば、帝国は我が国土となる。無論、バロン王が統治することになるが、自国を放り出して新しい領土にかかずらうことなどできはしない……故に、この国のナンバー2である私の出番となるのだ）

慇懃な顔はそのままに、胸中でほくそ笑む。

人相の悪いオロボイだが、頭脳の明晰さはバロン王に並ぶと讃えられている。文官にも

かかわらず鍛錬を重ねており、それで作り上げた肉体も五十代のものではない。バロン王には及ばないが、騎士団長位ならば互角以上に戦える剣の技量を持っている。

加えて、王にはない魔法の才能もあつた。知識に精通し、使い手としても一流であることは国の内外に知られている。

オロボイは、実績も実力も申し分ない。それは、自他共に認める事実。

しかし、王になることはできないだろうとも自他共にわかっている。

カリスマがないからだ。実益や実損を抜きにしても従いたいと他人に思わせる力が。

これがなければ、いくら正しいことをしていても、容易に被支配民に疎まれ、時には逆襲されてしまう。

自分がどれだけ持ち合わせていないかは、バロン王に仕えているとよくわかる。彼のためならば、例えばこちらが滅亡一步手前でも、最後の一人まで剣なり魔法ロッドは捨てないだろう。この自分も含めてだ。

（だが、カリスマのない私でも、王の権威を笠に着ることができれば、王のカリスマを得たことになる）

実力はあるのだから、カリスマさえ得られれば、王同然になることができるはず。

無論、旧帝国領をいくら上手く統治しても、そこがバロン王の領土であることに変わりはない。

けれど、そんなことはどうでもいい。

要は、自分の実力を存分に振るい、示し、そうしたい欲 野心を満たせればいい。  
統治領土を豊かにし、強くし、末永く讃えられるコミニティーに仕立て上げ、それをしたのがこのオロボイだと語り継がれればいい。

(私は…… 渉外大臣で収まる器ではないのだ！)

既に根回しは済んでいる。

大臣を抱き込むだけでなく、経済界の大物とも話をつけていた。すなわち、権力と人脈でヒト、カネ、モノを思い通りに動かす準備はほとんどできている。

欠けているのは、帝国討伐の命令が下ることのみ。こればかりは王の言葉を待つしかない。そして、これさえ発せられたならば、輝かしい未来へ続く扉が開くことになる。

(考えるまでもないだろう、宣告するのだバロン王、帝国を滅ぼすと！)

溶けかけの雪のように少し弛んだ頬を薄く紅潮させながら、炯とした目で王の口元を凝視する。握る手のひらに汗が滲み、規則正しい律動しかしないと置いていた心臓が、ドクドクと鼓動を早めていた。

「それは、如何なものでしょう」

凜とした美声が静かに響きわたった。

草原に一輪きりでも、気高く堂々と咲く可憐な白花を想起させる声音。

玉座の隣に控えていたソニア王妃だった。

(……くッ！ ソニアの小娘がッ…… また私の邪魔をするのか！)

心の中で歯ざしりしながら、異議を唱えた王妃を見る。

年齢は二十歳。夫の王とは父と娘どころか、祖父と孫ほど歳が離れていた。

老獪な自分も気圧されるほど、知的な輝きを放つ碧眼。

それでいて、清楚で無垢なあどけなさを残す端麗な顔貌。

雪のように白い美肌はきめ細かく、絹に勝るとも劣らない。

メロンの如きたわわな豊胸、砂時計の括れ、抜群の乳房と張り合える尻タブ。

均整のとれたプロポーションは芸術品じみているが、同時に欲望を覚える猥体だった。

類い希な美顔と相まって、カネで買えるのならば幾らでも出したい、気高い顔を汚い白濁

でドロドロにし、ふしだらに鳴かせたいという気持ちにさせる。

中央に紅い宝玉を埋め込んだシルバーティアラ。上乳を大胆に見せ、身体にぴったり

した純白の王族ドレス。どちらもよく似合っており、ひれ伏したくなるオーラを放っているが、それだけに、敵意を持つとことん穢してやりたくなる。

「戦況を考慮すれば、戦の勝敗は既についていると言ってよいでしょう。帝国にはもうバロン王の国を害する力はなく、よって安寧を脅かす力もなくなっています。ならば継戦は無意味ですね。必要最小限の戦力で街道の封鎖を行いつつ、和睦を呼びかけるのが適切ではないでしょうか」

誰と比べるにしろ、少なくとも父と娘ほど年齢差がある百戦錬磨の首脳陣を前にしても、威風堂々と意見を続ける。

何人かが目を細め、あるいはため息をついている。老獪な年かさ連中だというのに、孫の成長を喜ぶような、圧倒的な者に膝を折りたそうにしているような、そんな顔をして若き王妃を見詰めている。

「これ以上、どちらの国も……人も物も傷つく必要はないはずです。経済や物流にしろ、戦による影響は小さくありません。歴史そのものである建造物や文化品の損壊可能性は減少させることに越したことはありません。早急に経済も平和も回復させ、わたくしたちの本分……民の幸せのために傾けるべきだと存じますわ」

オロボイにしろ、利害対立がなければ聞き入っていたであろう弁舌だった。

(しかし、引き下がるわけにはいかんだ……私の野心のために……！)

瞳の奥に、心の底に、獲物を食い散らかす肉食獣の獰猛さが漲るのを自覚しながら、オロボイは声を荒らげ反駁した。

「和睦ですと？ 戦を仕掛けてきたのは向こう。こちらは滅亡させられるまで追い込んでいる。降伏勧告ならまだしも和睦など……」

同情心たつぷりの口調に切り替え、続ける。

「それで、命がけで戦った兵が納得するでしょうか？ 帝国兵によって親しい隣人を傷つけられ倒された者たちが許容するでしょうか？ ソニア王妃。あなた様とて、祖国を帝国に滅ぼされた身であらせられる。それをお忘れになられたのか？」

人道と王妃の過去に訴えることで、翻意を促す作戦だった。

「無論……我が故郷のこと、忘れてはおりません……」

王妃は、むち打たれた風に奥歯を噛みしめていた。切れ長の目が細まり、正面を向きながらそれを見ず、記憶の何かを視ている風な虚ろな瞳をする。

毅然と放っていた覇気にも陰が差し、しぼんでしまっていた。

バロン王に嫁いだすぐ後、王妃の祖国は帝国の侵略を受けて滅亡している。

親兄弟は戦死するか処刑されるなどして、もう一人も残ってはいない。

国土もすべて破壊、焼き討ちの憂き目にあい、歴史も文化も消されてしまっていた。

若いながら、端麗な容姿と聡明な頭脳を持つ王妃は、夫である王と同じくカリスマも持

ち、『よそもの』の後妻でありながらこの国の民から絶大な支持を得ている。背負った薄幸の過去も、悲劇の王妃として人気を高める一助になっており。対帝国戦線にいる兵士たちの士気の源にもなっていた。

王妃が帝国滅亡を口にすれば、国民も王も追従するだろう。彼女にしろ、望まぬ理由はないはずなのだ。

国のために戦い、傷ついた者の存在。大切な人を損なわれた者がいる事実。明確にすれば、心清らかな王妃も義憤に駆られないはずはない。

（ククク……さあ、帝国への怒りを思い出せ！ 憎むのだ！ あんな国など滅ぼしてしまえと口にしろ！）

「ですがわたくしの身の上など、アダルトリー魔法王国の戦の理由にはなりません。抗戦

理由はあくまで自衛。目的を果たせたのであれば、継戦は不要です」

王妃は、こちらをひたと見詰めて断言した。瞳に宿る断固とした意志は、岩盤よりも堅固に思えた。この目の人間の心を動かすなど、蟻が巨石を運ぼうとするようなものだろう。

(グムツ……どこまでも人のできた小娘が！)

決着はついた。

被害者であり、王並みの人気を集める王妃が和睦を望むのであれば、日陰者の自分が何を言っても無駄である。

抱き込んだ者たちにしろ、自分の利益というものがある。この状況でカリスマのない男を擁護するなど、火中の栗を拾うよりも危険でうま味のない話。

バロン王は、毅然とした若妻の態度に満足そうに頷いている。

支持しているのは明確だった。

(おのれ……目障りな女がアツ！ 今度という今度は許さぬ！ その意見、私に都合がいものに変えてやる……この場では無理でも、やりようはあるのだぞ……！ ……………この際だ、一度と私に逆らえぬよう、身も心も支配してやる！)

王妃の鶴の一声で、自分の提案が棄却されるのは今回が初めてではない。

同じようなことは何度もあった。

いずれの時も、年若い娘とは思えない威厳を放ちながら真正面から阻止してきた。

別に、自分を嫌ってしているわけではないだろう。

（まあ、愛人を何人も困ったり、時には部下の恋人や妻を権謀術数で奪い籠絡している私の噂は聞いているだろうからな。夫の王は清廉な大人物。自身も心も身体も清楚可憐なのだから、『ズルいたち』など身の毛もよだつ男だろう……しかしあの娘、公私の別はつけてくる、そこがまた憎たらしい……！）

自分も間違いを言っているつもりはないが、王妃の言うことは、相対的にはあるがいつも正しい。

反対されることはあっても、子供じみたケチつけや言いがかりの類では決してない。

鍛え上げた実力を振るい、示す機会を邪魔されることも苛立たしいが、言うことに非合理性や矛盾がないことにも腹が立つ。王妃らしい気高さを放ちながら、滅多に感情を揺らがせないことも疎ましい。

（たかだか二十歳の娘だというのに、可愛げというものを知らんのか……！）

優秀で、自分にはないカリスマを持ち、美しく、非の打ち所なくて、いつも自分を阻む女。

（私に……こんな汚らしい男に、麗しい才女が楯突くとどうなるか……たっぷり思い知らせてやる！ 王の妻だろうと、もお関係ない……私のセックス奴隷になるがいい！）

和睦する方向で話を始めた王に、一応は耳を傾けるオロボイ。

表向きは涼しい顔をしていた。腸の煮えくり返る思いを噛み殺して自分の不明を恥じる言葉を吐き、王の決断を讃える。

胸中では、王妃への牡の欲望と復讐心を燃え上がらせながら。  
そして老獪な頭脳は、ソニア王妃を陥落させる淫猥な手段を練っていたのであった。

## 第一話 触手に注がれる不妊汁 憎き大臣の解毒汁

トントン。

寝室のドアがノックされたのは、周囲が暗くなった後だった。

「どなたかしら……」

王妃ソニアは小首を傾げて呟いた。

夜着に着替えるためにドレスへ伸ばしていた手を引っ込めると、ドアをじっと見詰める。侍女を下がらせ、一人になったばかりだったので、倣う者は他にいない。

心当たりはなかった。

王は財政大臣のバースデーパーティーに招かれており、今夜は戻らない予定。夫以外の誰が、夜に訪ねてくるのだろうか。

「念のため、用心はしておきましょう」

ここは王城。物騒な者が出入りできる場所ではないし、ここに至るまでの廊下には近衛騎士や兵士が控えてくれている。彼らの士気も実力も疑いようがない。職務放棄はもとより、警鐘を鳴らす間もなく無力化されるとは考えにくい、

そう意識しても、虫の知らせは消えなかった。頭の中で静かに鳴る非物理的な警鐘は、どうにも無視し難い。

スウツ。

深呼吸して意識を集中させる。

いつでも魔法を唱えられるよう、精神を高めていく。

（わたくしは、魔法さえ使えば自分の身くらいは守れますけれど……使つことにならなければよいのですが）

いくら身を守るためとは言え、その時は誰かが傷つくだろうから。

例え誰であれ、人を傷つけるのは避けたかった。

どんな人間も、傷つくために生まれてきたのではない、幸せになるためにこの世界で命を得たのだと信じたいから。

最初に教えてくれた家族も祖国も帝国に滅ぼされてしまった時には、彼の国だけでなくこの世のすべてを恨みもした。しかし、全身全霊で愛情を注いでくれる夫が、慕ってくれるこの国の民たちの温かさが、改めて信じようという気にさせてくれている。

「夜分に失礼します。私です、オロボイです。陣中見舞いの件でお伝えしたいことがあり、お伺いいたしました」

緊急事態に即座に対応できるよう、心身を緊張させながらドアに近づくと、気配を察したらしい向こうの者が声をかけてきた。

（渉外大臣……オロボイ殿でしたか……）

狡猾なたち顔が脳裏に浮かぶ。

ほうつと息をついている間に、全身の余分な力は抜けていた。

オロボイは人相も素行も悪く、正直、顔を合わせたくない相手ではある。

しかし、王妃を害するような無軌道を行う馬鹿者でないこともわかっている。警戒する必要はない。

それに、用件も正当だった。前線の兵士を労うために王妃自ら赴くことは、彼の提案であり、自分も承諾したこと。夜中に大臣自らメッセージャーになっているのには多少の引っかかりを覚えるが、ひよつとしたら重要なことを持ってきたのかも知れない。

「ご苦労です、オロボイ大臣。今、扉を開けますわ」

ギギイ……。

「ありがとうございます。それでは、失礼いたします」

大臣服を着ていても、鍛えた騎士のようにガツシリした体躯の線を見せる壮年の男は、頭の上で慇懃に挨拶を述べた。

「……え？」

どうということもない動作で、手に持つ湿り白布を鼻に押しつけてくる。

不自然だがあまりに自然な動作だったので、反応が遅れてしまう。

しまった。そう思った時には既に手遅れで

ガタッ！

「な……なんですのこれは……身体から力が抜ける……？」

蜂蜜めいた甘ったるい香りが一瞬で鼻腔を満たした。芳醇な香りは頭の芯を軽く痺れさ

せ、次の瞬間には四肢の力が抜け落ちる。

立つていらなくなり、床に膝をつくと、人形のように前のめりに倒れ伏す。

ひだの高い真紅の絨毯の上で、メロンじみた豊胸が潰れ、腋の下からさらにはみ出た。腰が天井に向かって突き出ているので、伸びきったドレスの白生地が、熟れた桃のようなヒップの輪郭を浮かせている。異常事態に戸惑う中でも、夫でもない男にあられもない姿を見せる恥ずかしさは一番強く、こめかみがカツと熱くなる。

「クク、私が作った脱力香の効果は抜群のようですな。これで暫くは動けますまい」  
邪悪に口角を吊り上げる『ズルいたち』。

大臣といえどみだりに触れられない王妃の身体を、情婦でも抱くかのような所作で抱え上げ、ベッドに仰向けに寝かせた。

大の字に手足を広げる格好にすると、懐から取りだした縄で手首と足首を縛りつけ、ベツドの柱にくくりつける。所作には淀みがなく、酷く手慣れた様子だった。

「おやめなさいオロボー！ 気は確かですか！」

「無論正気です。私は今、ソニア王妃をベッドに拘束している。あられもなく手足を広げた大の字にね。そうですね？ そして、これから裸に剥かさせていただきます」

凜声で叱りつけ、睨みつけるが少しも動揺しなかった。

將軍並みの勇ましさと力強さを宿した叱責だったというのに、まるで効果がない。

オロボーはニタニタいやらしい笑みを浮かべながら、魔法を唱える。

「それは転移魔法……裸に剥く？ まさかつ……きゃっ！ ああっ、い、イヤアツツツ」

一瞬の内に起きた身体の異変に、年齢相応の絹を裂く悲鳴を上げてしまつ。

大臣が発動させたのは転移魔法により転移したのは、自分の衣服だった。

着ていたドレスはすぐ側の床に、自分の形で広がっている。ブラジャーもショーツも一緒に送られたらしく、夫以外には見せるべきでない乳房も陰部も、不埒な大臣に丸見えになつてしまつていた。

「ほほう、服の下はこうなつておりましたか……なるほど、美しい娘だとは思つていたが、これほどまでとは」

雪色のきめ細かい肌が描く、成熟した女性のラインをじっくり見ながら、しきりに頷く。目つきはどんどん凶暴になり、瞳が宿す輝きも炎のようにギラついている。もう、自分を王妃とは見ていない。買った娼婦に舌舐めずりでもしている目つきだった。

「わたくしのこの身はバロン王だけのもの……あなたが見ていいものではありませんっ。顔を背けなさい！」

大声を出す度に、仰向けでも崩れない肉メロンと、その先のグミ形鶉色乳首を上下動させながら眉目に力を込めて見据える。

「これほど見事な女体を見るなどは残酷なことを……お優しいソニア王妃の言葉とは思えませんなあ、クツクツク」

まるで聞き入れる様子にはなかった。それどころか、瞬きをやめてくる。

王妃の証のティアラだけをつけた裸のソニアに、下劣な男の視線は容赦なく突き刺さってくる。手などで触れられていないというのに、軽く柔らかな圧迫感を覚え、妖しい媚感が身体に広がりだしていた。

ソニアは王の若き妻。孫と祖父ほども歳が違う夫婦ではあるが、夜の営みの経験は豊富だった。性感と無縁な処女ではないのだ。

(いけません……見られて興奮してしまうなど……しかもこんな下劣な男に……！)  
屈辱と自責の念で端麗な眉目を八の字にたわませる。

熱視される豊満乳房が、大輪の花のように咲き誇る牝股間が、若娘らしくピンと肌が張りながらほどよく膨れた太腿が、薄いむず痒さで覆い尽くされていく。心臓がトクトク早まっているのが、自分が昂ぶり始めていることを自覚させる。

「誰か！ 大臣が乱心ですわ！ 誰かいないのですか！」

このままではどうにかなってしまいそうだし、大臣に何をされるかもわからない。普段ならば決してあげない大声で助けを求めるが、誰かが駆けつけてくる気配はなかった。ドアの向こうの廊下は静寂で満たされていて、コトリとも物音がしない。

「無駄だ。音が漏れぬよう、この部屋の出入り口には『静寂の魔法』をかけておいたからな。高性能の魔法具まで使った強力な結界。例えば百匹の猛獣が咆哮をあげても、誰も何も聞こえはしないぞ」

「……用意周到な……それならば自分の身は自分で守るまでですわ……大気をたゆたいし魔力の粒よ。我が意に従い、我が刃となれ……エア・エッジ!」  
ソニアは早口で呪文を唱える。任意の場所の大気を凝縮し、空気の刃に変える魔法だった。狙いは四肢を縛るロープ。まずは自由を取り戻し、早くこの恥ずかしすぎる体勢から逃れたかった。

「そんな……どうして魔法が発動しないのです……!」

正確に呪文を唱えたというのに、効果はまったく現れなかった。

何事もなかったかのように、ロープは本来の形を保ち、少しも弛むこともなく、手足とベッドの柱を結びつけている。

「ククク……珍しく随分動揺しているようだな? 貴様が類似希な魔法の使い手だとい

うことを失念していると本気で思ったか? らしくない無駄な努力をするとはな」

悠然と胸の前で腕を組み、こちらの顔を見て含み笑いしながら続けてくる。

「既に手は打っていた。お前のティアラだよ。侍女の一人を買収し、そっくりな別物に変えていたのだ。『魔法封じの額冠』……知っているな?」

聞いた途端、血の気が引いたことは自分でもわかった。

まるで氷に囲まれているかのように、身体が冷めていく。

告げられたアイテムは、装着者の魔法行使を一切できなくする物で、無法者の魔法使用を拘束する際に使われる魔法的な拘束具だった。対自分用に用意された物ならば、魔法は

封じられたと見るべきだろう。甘い期待はまったく抱けない。

(なんとということなのです……これではわたくしは何もできないではないですか……！)

身体を縛られ、助けを呼べず、頼みの魔法も使えない。

手足をもがれた気分だった。

しかもオロボイは、自分に劣情の感情を向けている。

(犯されてしまうのですか、わたくしは……そんなことになれば王に……愛しいあの

方に顔向けできませんっ)

下劣漢に辱められるのも屈辱的だが、例え不本意であったとしても、夫以外の男に抱かれるなど考えただけで目眩がする。

(わたくしにとつて、それは不倫に等しい行為……)

賢く強く、優しい夫。

歳が離れているが魅力的なバロンを、ソニアは心底愛している。

偉大な英雄に胸を焦がす乙女の思慕、愛妻家の夫と共に暮らせる妻の悦び、女に生まれたい幸福を堪能させてくれる異性への情愛。そんな好感情が混ざった深い愛情を抱いている。

それだけに、絶体絶命の今、杭を打たれているかのように胸がズキズキ痛む。

「見損ないましたわオロボイ。あなたが、こんなことをする愚か者とは……」

「私の邪魔ばかりするからだ。帝国など滅ぼせばいいものを、よりによって和睦だと？ 貴様が言うことも正しいとわかるから、間違っているなどと幼稚なケチをつける愚行はせん。

しかし、至極つまらぬ正論だったよ」

胸元に持ってきた手のひらを天井に向けると、魔法を唱える。

「何を言っていますのあなたは……………それは召還魔法？ 一体何を呼ぶつもりで……………才

口ポイ、今ならまだ恩赦もできますわ。今すぐわたくしを解放してください！」

ジュワアアアアア……………。

凜然と叫ぶ王妃へ応える風に、大臣の手のひらから毒々しい紫光の柱が上がった。

不安をかき立てる不気味な光の光源からは、触手が次々這い出てくる。

何十匹ではきかない数だ。百匹はいるだろうか。

夫と愛の営みもした部屋に、おぞましい生き物が溢れかえっていた。

「許しなどいらぬさ……………それよりも見るがいい。こいつらは私の血で作った魔法生

物……………意のままに動く分身とも言える触手なのだよ」

ミミズのような形をした触手たちの径は、幼児の手首ほどもある。蛇などよりもずっと

太い。桃色寄りの紫色をした体色は毒々しく、見ているだけで怖気が走る。体表から粘液

を滲ませているらしく、常時ヌラヌラ照り光っている。

どう見ても、気持ち悪いとしか思えない環状生物だった。

触手は群をなしてベッドの柱を這い上り、手足を縛られて動けない自分に近づいてくる。

通り道には粘液の足跡が残り、栗の花めいた臭気がくゆっていた。

「このおぞましい触手どもで、わたくしをどっしりよっしりこののですー！」

腐肉色の肉紐たちからは強い力は感じない。

普段ならば魔法で簡単に消滅させられるだろう。

しかし、今の自分にはどうすることもできない。

もしも、大挙して身体に押し寄せてきたらと思うと、目眩に襲われるが、悪漢を前に下手に出ることなどしたくはない。

瞳で反骨心の炎を燃え上がらせながら、オロボーに怒鳴りつける。

「犯させてもらうだけだ」

「犯す……？ この気色の悪い触手でわたくしを辱めるといいますか！ わたくしを逆恨みして！ 偉ぶっていてもあなたは十分愚か者です、オロボー！ こんな馬鹿者とは思いませんでしたわ！」

「またつまらぬ正論を……辱めると言うのは少し違つな。私は犯すと言っただけだぞ？ 触手陵辱で終わりではないのだよ。これから時間をかけて、様々な手段で徹底的にお前を穢し、屈服させるのだ。二度と私に逆らえないようにな」

にゆるにゆる距離を詰めてきた触手たちは、ベッドの周囲を取り囲む。

どれもが蛇のように立ち上がり、先端を身体に向けてくる。

目はないのだが、まるで、大勢の男に囲まれて視姦されているかのようだった。

肉端の視線はグラマラスな裸体のそこかしこに突き刺さる。身体の隅々に感じる無形の圧迫感は、全身を無数の男に愛撫されているみたいで、ふしだらな微快を味わわせ、呼吸

が少しずつ乱れていく。

（っう……化け物に見られているのにわたくしの身体は……反応してしまっているのですか……？ どうしてこんな……ッ、ですが……！）

「穢し抜いて屈服させる？ 下劣な……誰があなたのような卑怯者に膝を折るものですか……わたくしはこの国の王妃であり、偉大なバロン王の妻……例えどんなに陵辱されようとも、負けはしません！」

普段はたおやかな眉目をキツと吊り上げ、言い放つ。

「ほう、この状態でもそれほど気を吐けるとはな……助けを請い、二度と私に楯突かないと誓えば許してやる……そうも考えたのだが」

「お断りしますわ……あなたのような男に慈悲を請うなど……わたくしは何をされようとも決して屈服しません……辱めに耐え抜き、必ずあなたに報いを与えて差し上げますワ……！」

贗物ティアラの裸王妃は柳眉をつり上げ、一瞬も目を離すことなく断言した。

「ククク……その勢い、どこまで持つかな……やれ」

ニユル……シユニユル……。

大臣の言葉を受け、二匹の触手が動きだす。

蛇が川を泳ぐ風にシートを這い、王妃の細く可憐な両脛に張り付いた。

パツパツと肌が張りつめ、令嬢然とした白く細めの太腿に螺旋状に巻き付きながらウエ

ストに進み、窄まった脇腹をくすぐり、仰向けでも上向く肉メロンの根本に到達する。触手の頭と触れあつた微かな振動で、頂上の薄ピンクグミ突起が夏草のように揺れた。

「っ……………」

（触手に這いずられているというのに……………身体がむず痒く……………んうっ……………）

粘液を纏う触手はべとべととしていた。脛から胸元まで這われたせいで、透明な粘液は肌に付着し、細長い足跡の通りに高貴な肌が照り光ってしまっている。

触感是人の皮膚のように柔らかく、温かい。見た目よりも内部の肉は詰まっているらしく、純金のブレスレットでも置かれた風に、胸元にずっしりした重みが押し掛かっている。

視姦される微快感は胸にも広まっているせいか、触手に居座られていると甘いむず痒さが濃くなって、じっとしているのも辛くなってきた。肉紐をどかせて搔くことができれば爽快だろうに、手足を縛られているのではそれもできない。

「それにしても見事な乳房だな」

（そんなに見ないでくださいっ……………胸が、おかしくなります……………うっ……………）

卑劣な大臣は、王だけが見ることのできる王妃の豊胸を凝視する。

欲望の籠もつた強い視線は、解消できないむず痒さを強め、これまで以上に乳房を甘く痺れさせる。心臓の鼓動が少しずつ早まっていくのも、それに少しずつ快感が加わっていくのもとめられない。

「目を背けなさい……………わたくしの身体はバロン様だけのもの……………お前が見てよいものでは

ありませんわ……!」

(はあ、はあ……… そんなに見られたら……… 嫌でも意識してしまいます………)

身体の熱が上昇している。特に甚だしいのは、熱視されている乳房だった。下乳に軽く鳥肌が立ち、ゾクゾクする寒気に襲われるが、他の部位は逆にカアツと熱くなる。

「染み一つない綺麗な肌…… 若いだけに張りが強く、仰向けでもぜんぜん崩れていない熟れた乳房…… 乳輪も乳首もプルプルか。見れば見るほどむしゃぶりつきたくなる…… 王も好きなのだろう?」

雪肌の絹のなめらかさ。腋のラインさえ嵌みだし、内乳同士で押し合いながら上向く肉メロンの造形美。頂でツンと天井を見上げるグミ乳首と乳輪の瑞々しさ。どちらも乙女のように初々しいピンク色をしている上に、抜群の豊胸と釣り合いのとれた丁度いい大きさで、男ならばしゃぶりつきたくなる逸品だった。

賢王と名高い夫も例外ではなく、よく可愛がつてくれている。くたくたになるまで揉まれるのも、赤子のようにチュウチュウ乳首を吸われるのも、肉体的な快感だけでなく、愛する男性に求められている女冥利を感じ、心身ともに心地よくなる。

それだけに、心を許さぬ男や化け物に見詰められているこの瞬間は耐えられない。不節操に悦楽を感じてしまう身体が恨めしかった。

「お黙りなさい! そんなことはあなたに関係ないでしょう……んっ………」

「ほう、凶星のようだな。あの王もやはり男なのだなあ…… ククク、それにしても、見ら

れているだけで興奮したようだな、ん？ 普段はセックスとは無縁そうな澄まし顔をしている癖に、王とはだいぶお盛んならしいな。随分開発されているのだろうか？ 夫も大好きなお前のいやらしい乳房……触手で穢してくれる」

待機していた触手が動く。

夫だけが触れていい、重力に逆らってそびえる極上の白肉果に、根本から螺旋状に巻き付いていく。

シユルル……シユルツ……。

「はああっ、うっ……触手が……は、離れなさいっ、そこは……ンンっ……！」

ギリッ……ギリッ……。

乳肌にぴたりと重なりながらとぐるを巻く触手は、じわじわ締め付けてくる。

粘液で光る肉太紐は乳房の内部にまで食い込んでいた。手のひらで揉めば蕩けそうな柔らかさと弾力を味わわせる乳房は、触手の背中になだれ込み、覆い被さっている。

「うっく……はあ……はああっ……」

締め上げられる圧迫感に、胸が詰まり、吐息がいやらしく乱れてきてしまう。

ギリリ……ギリイ……。

呼吸の音色が妖しくなり始めても化け物の締め上げは止まらない。亀の歩速で続けてくる。

絞られる乳房は、巻き付く触手の間からはみだしていた。その量は刻一刻と増えていき、

螺旋状に紐で縛られた風な外観に変わっていた。

特に甚だしいのは先端で、マツシユルムスの先端のように突出している。薄ピンク色の乳輪も、グミのような形の乳首も上方へと突き出てしまっており、触手たちの視線が容赦なく刺さっていた。括り出された頂に起こる視姦快感に、シーツと触れあう背中がピクピク震え、その振動は腕の裏も、搾られている乳房まで伝い、揺らされる。

締め付ける間も滲み続ける触手粘液が乳肌に絡みつき、染み込んで、食い込む身体に沿って王妃の高貴な乳果実も照り光りだす。

（どこまで絞るつもりなのか、んんっ……このままでは握り潰されて……はあッ）  
シユルルツ……。

ふと、乳房が潰され肉が四散する光景が頭の中に浮かんだ刹那、触手から一気に力が抜けた。

引き絞られていた乳房が、音が聞こえそうなほど量感たっぷりに揺れて、元の肉メロン形に戻る。

触手は締め付けるのをやめ、ただ乳肌に吸い付いていた。

「はうっ……んんっ……はあぁ……ふう……」

（胸が元に戻ったのは幸いです……この感じは……）

螺旋の圧搾から解放された安堵感と、元の形に戻る過程でブルルンと揺れた乳房の心地よい振動の残響が胸の中に広がって、思わず柔らかいため息を漏らしてしまう。

「人間に揉まれるのとはまた違った快感だろう？ もつと味わわせてやる」

「馬鹿なことを……わたくしは触手などに弄ばれて快感などは覚えませんわ……！」

反駁は、必要以上に大きな声になってしまっていた。

乳房は夫に可愛がられている部位だけに、性感はかなり開発されている。

そのせいで、ほんの、本当にほんの少しだけ性的な心地よさを感じてしまったが、まさか正直に告げるわけにはいかない。

「クク……貴様が感じていたことなど、反応を見れば童貞でもわかつたろう……あくまで否定するというのなら、じっくり味わわせ、素直にさせてやる」

パチン、と大臣が指を鳴らすと、乳肌に貼り付いていた触手が再び締め付けてきた。

大男が思い切り指を食い込ませる風に、乳房の深いところまで埋まり込んできて、雪肌の肉果実を螺旋状にひしゃげさせる。

「はあああ……んっ……んっ……！」

（ま、また絞られていますわ……わたくしの……バロン様だけの胸が……っ）

乳房を構成する肉が、力付くで出螺旋状に圧迫される感覚が胸に居座る。痛みや苦しみはあるものの、不思議なことに同じくらいいむず痒さを感じさせられ、再び吐息が乱れだす。

限界まで食い込んできた後、触手は数秒制止し、肉紐の感触と圧搾感をたっぷり染み込ませてきた。

そして、フツと力を抜き、乳肉を弛ませる。

「はふううんん……はあ、はあ……んっん……はあ、はあ……」  
根本から上下左右に揺れながら、元に戻って止まる肉メロン。触手は、乳肌にぴったり吸い付いてくる。

（この感じ……ああ、この安息感……これはだめですわ……続けられたら、はあッ）  
「また締まってきて……んっ、はああんッ！……はあ……はうッ！」  
絞っては解放する。

同じ動作が何度も繰り返される。  
締め付けと解放が行われる間隔は次第に短くなっていく。

一定テンポでリズムカルに行っているとせば、唐突にリズムを変えてくる。長く締め上げられることも、暫く乳肌に貼り付いているだけで何もしないこともあった。触手の動作には規則性を見いだせず、予想できない乳責めを延々と甘受させられる。

「うっっ……はあん……む、胸が……わたくしの……あの方だけの乳房が……あ、あ  
あっん、しょく手に揉まれて、いふっウッン……っ」

何度も何度も乳房全体が圧迫されて、解放される。  
まるで人間の揉み愛撫だ。

しかし、螺旋状に巻き付いて揉んでくるなど人間には不可能な愛撫。無論、触手に胸を揉まれた経験などは一度もない。それだけに、乳房一杯に広がっている悩ましい乳悦をやり過ぎることなど、とてもできなかつた。



るオロボイは、カイゼル髭の先端をクックと揺らしていた。

自分の分身が責め立てる様子を見て、自身が生意気なソニアを感じさせていると思っ  
ているだろう。触手というおぞましい生物に穢されているというのに、悦楽を感じてしま  
っている王妃の不覚をあざ笑う気持ちもあるはずだ。

「こんなことっ……わたくしは、触手に心を奪われたわけではありません……ふうくっ、  
バロン陛下に可愛がっていただかなくてと素敵で、すっ、はうん！」

気を抜くと眉目も口の端も弛んでしまう美貌を引き締め、睨む。

確かに、自分は悦ばされている。

けれど、この快感に流されるつもりはないし、ましてやオロボイに負けたという意識  
もない。

触手の胸揉みは初めての経験だが、そのうちきつと慣れるはず。このまま意識を強く持  
ってやり過ごし、逆転のチャンスを掴んでみせる。

どうしても漏れてしまう自分の喘ぎ声に耳たぶを赤くしながら、強く思っ。

「喘ぎながら啖呵を切っても意味はないぞ……そら、心は逆らう気でいても、身体はふし  
だらな反応を示してしまっているではないか」

オロボイの目が乳房から離れ、薄く整った腹部にスライドし、さらに下へ移動する。

欲望たつぷりの視線を浴びせられるのは、大股開きの胴底に咲く一輪の肉花。

表面は他の部分の肌のように白くなめらかで、染みなどは一点もない。

まだ二十歳の娘の持ち物だというのに、何年もセックスを楽しんできた熟女のように肉厚に育ち、ぼつてりと肥厚していた。小指の幅もない綻び具合は清楚感を醸し、百合の花を彷彿とさせる可憐さなのだが、その小さな隙間は裏切っている。

「なっ……………あ……………」

(そんな……………愛液がここまで……………漏れてしまっていたのですか……………!)

心地よい甘酸っぱさを放つ媚蜜が、小川みたいに流れているのだ。その量の多さは、女である快感を堪能する女のそれであり、浅ましさを示す物証だった。

汁は可愛らしい会陰を伝い、潰れて広がるお尻の臀裂と、股間下のシーツに向かって枝分かれてしていた。夫とも愛を確かめ合ったベッドには、触手の胸愛撫によって搾り出された不貞恥汁の染みが広がっており、その大きさは握り拳ほどもある。

「触手に胸を責められただけでこの有様とは……………とんだ淫乱王妃様だ。生意気なことを言っただが、本当はもっと苛めて欲しくて噛みついていただけなんじゃないか？ なんなら、触手を使って胸だけでイかせてやってもいいぞ」

「勝手なことを……………うつつんツ、わたくしは決して楽しんでいませんわ……………身体が自由であれば、くっ……………魔法が使えれば触手ぐらい……………あなたなどは、ひいああっ」

肉紐に強く揉み込まれて反論を潰されている間に、大臣は魔法を唱える。

先ほどと同じ召還魔法が発動すると、今度はまったく違う触手が現れた。

「うつく……………な、なんですのそれは……………あうん……………!」

例えるなら、千切れて一直線になった真珠のネックレスというところか。赤子の握り拳大の青白い瘤が鈴なりに連なつた形状をしている。

金属的な青白さは一見すると宝石めいた鮮やかさであり、表面も同様のなめらかではあつたが、床を這い、柱を上る姿は他の触手と同じだつた。ミミズなどの環状生物の生き物臭さが溢れていて、気色のいいものではない。

連玉型の触手はベッドに粘液の跡をつけながら、股間の下にやってきた。

他の触手と同じく蛇のように立ち上がると、女泣きする丸っこい先端を秘裂に押しつける。

（人肌よりも少し熱い体温……ヌルヌルですが肌触りも見た目の通りなめらかで……それに……んあ……）

絶えず噴き出る栗の花臭い粘液が、妙な吸着力を發揮して、恥蜜塗れの秘裂に吸い付いていた。

（触手がわたくしの恥ずかしい所にくつついて……ドクドク脈打って……いる……んんっ……）

ぴったり触れあう接着面から、力強い脈動が伝わってくる。

興奮したペニスと同じ、牡を感じさせる振動だつた。

ふと、夫と一つになる時の記憶が脳裏をよぎり、身体がぼつと熱くなる。

愛しい王の肉棒は、末広がりの尖り肉。球体の触手とは違つのだが、膣内が一カ所残ら

ず妖しくうねり、切ない疼きで一杯になる。

(か、身体がいやらしい反応を……ああ……だめです、これは触手……化け物なのに……) 身体に淫らな熱が籠もり、股間から伝わってくる。ピリピリという心地いい快感電気に意識を遠くしてしまおうが、ちよつとずつ生まれている陰唇の拡張感にハツとした。

ミチユ……………ミチチ……………。

「ま、まさか……………おやめなさい！ わたくしの中に入ってきてはなりませんっ」

(この触手……………腔に入るつもりなのですわ……………！ そ、それは……………それだけは……………！) オロボイの態度と触手の様子から浮かんだ最悪の予感に蹴り飛ばされて触手に向かって叫んだが、相手は頓着しなかった。

ジュリ……………ジュブリ……………。

丸ごと鉄でできているかのようなズシリとした重量感が、スベスベヌルヌルの生き物の肌触りと熱感をなすりつけながら、若妻王妃の肉唇をゆっくりかき分けていく。

ぼつてり熟れた女肉花卉は上下左右に丸く広がり、内側の肉は触手の表面にぴったり重なっていた。

「ああ……………はああああ……………！」

(こんな……………いやですわ……………触手が腔に入ってくるなど……………ああ、でもどうしてですの、化け物が入ってきているのに、苦痛がないなんて……………ンンッ……………)

触手の体温は安堵感を感じさせる生き物の温かさ。夫のペニスもカリ首に何度も引っ搔

き回されてきた膣肉も、勝手に押し入ってくる肉紐も、又める汁を嘔きだしているので、挿入感はひたすら丸っこい。

小さくない丸い肉玉が一つ、また一つと入り込んでくるのには胸の詰まりを覚えるが、不快であるどころか、頭が霞がかつてくる淫靡な圧迫感で、覚えてはならない欲望が心の底から湧いてきて、胸の奥が揺すぶられる。

（相手は触手……卑劣な大臣の分身のおぞましい触手……んっ、なのになんか……んっ、なにわたくしはどうしてふしだらな気分になっているんですの……？ はあ、はあ、こんな気持ちは……夫に愛されている時だけしか感じてはいけないというのに……く、ふうっ……）

女壺を自分の形にしている触手が前進すると、王だけのものであるはずの蜜ヒダから甘ったるい電気が走り、膣全体の体温を上げる。刻一刻と触手が占領する部分が広がって、心臓が心地よく早鐘を打ち始める。

「はあ……はあ……アソコが……んふうっ……あ、熱くて……はあ……」

「大事な部分に触手が入っているというのに、随分気持ちよさそうだな。貴様は王の女なのだろう？ だというのに触手……化け物で感じていいのか？」

「わたくしは感じてなど……はっ、はあっ……この位、感じている内には、あふうっ、は入りませんわ……んアア~~~~ッ！」

反駁し終える直前、触手は子宮口にまでたどり着き、コンコンとノックしてきた。

子宮まで響く快感ノックに、抵抗の声はいやらしく裏返ってしまう。球形の瘤を頬張る

肉唇からはトプリと新しい汁が漏れ、入りきらなかった五六個の触手肉玉へと伝い、大人の握り拳の大きさに広がっていた股間下の蜜染みを拡張させる。

(触手が子宮口まできて……んふうあ……だめ、です……この感覚……) 見るからに気色の悪い生き物だとは頭では理解している。

だが、膣と子宮に伝わってくる体温は日溜まりのように心地よい熱さだった。血が充実した海面　ペニスのように柔軟で硬く、身体の内外の血管が激しく脈動している。

(はあああ……き、気持ちいい……ですわ……) 夫だけに許すべきである膣に、化け物を迎え入れている感想が胸中に勝手に浮かんでくる。

昂ぶり始めている女壺を、触手の形に広げられている蹂躪拡張感。

力強くていやらしい牡肉塊に征服される充実感。

強い牡に組み伏せられることに悦びを感じる牝的な本能をくすぐってくる。

人間の男が相手ならば股間や太腿の周囲に、彼のそれらの存在感を感じるもの。その感触の不在が、触手に犯されている事実を肌にも覚えさせるのだが、味わわされる触手の悦びは消えず、居座り続けている。

ブルルル……ブルルルツ……。

「は、はふうっ……だ、だめですっ……奥……奥でそんな風に、あふあ、あ、暴れられては……!」

最奥にグイグイ食い込んでくる触手肉玉はブルブル震えだしていた。

最初は身震いする程度の振幅だったのが、段々と激しさを増し、眠る他人を揺すり起す風な猛烈な振動へと変わっていく。

（あつ……んんっ……中が、ああ、揺すられますわ、はあうっ……まだ、強くなるのですか……ああ、はうっ……！）

膣ヒダ表面に味わわされていたむず痒さが、ヒダの芯まで揺すぶられる悦びへと変貌し始める。王妃にあるまじき大股開きの股間が、快感のあまり小さく上下に弾みだす。

（こんな感覚……、ああっ、は、初めてですわっ……ん、んんっ、中を……膣の中を揺らされるなど、されたことがない、ですのに……こんなに感じて……ああ、はあッ）

愛する夫との性生活どころか、半生で味わったことのない化け物ならではの責めに、気丈な王妃の眉目の尻から力が抜け、ゆっくりハの字に変わっていく。

度を越えた悪寒に震える風な触手振動は、子宮まで揺すぶる強さに変わり、感じてはならないいやらしい快感は膣内全体にも伝播していた。膣にも子宮にも激烈な快感電気が駆けめぐり、心臓は壊れた風に拍動する。

ブ~~~~ンッ！ ブ~~~~ンッッ！ ブ~~~~ンンンン！

「はあっ、ああっ、あっ！ だ、だめえ、震えすぎで、すわ！ ンあああ！」

吐き出す喘ぎ声は、いちいち淫らな切迫感を宿し、気を抜くとあられもない嬌声を響かせてしまっ。

身体が燃えるように熱い。熱くなると膣が疼き、振動快感がもつと欲しくて堪らなくなる。せわしなく喘ぐ王妃の股間からは、だらだらと新しい恥蜜が流れて止まらない。

「どうだ。これが貴様が嫌悪した触手の味。化け物ならではの快感だ」  
触手に胸を揉まれていた時と同じだった。

人間としかセックスをしたことのない女では、やり過ぎすことも耐えることもできない。  
(ですが……ああん、快感だと、あひいッ、み、認めるわけにはいきませんわ……例え、えん、悦びを覚えてしまっても……わたくしはこの国の王妃であり、あの方の妻……触手などに……不埒者の軍門にくだってしまおうわけには、はあっ、はあっ！ 負けたりしては、ンンッ……！)

「ん、ンンッ、わ、わたくしはこのくらい、あっ、あああっ、クウ、うっうッ！」  
折れない心を、身体が裏切ってしまった。

勝ち誇る大臣に反感を覚え、毅然としようと顔に力を込めても、膣の快感ですぐに脱力してしまい、眉目をトロンと弛まされる。平素ならば知的な碧眼も、望まぬ法悦の涙に濡れており、知性の輝きも鈍っていた。

「このくらいで満足できぬか？ ならば、もつと感じさせてやる」  
愚鈍でもない大臣のこと、負けません、と言いたかったことはわかっていたらるうに、自分の都合のいいようにねじ曲げて後を継いだ。

ニユルッ、ニユルル……。

ふしだらに解釈されたのが悔しくて、喘ぎながら唇を噛んでいると、横手から赤黒い触手が進んできた。

汗で照り光る横乳がはみ出す腋の下の傍までくると、蛇のように立ち上がる。身体でアチを描きながら細長い先端を乳首の直前まで下ろした瞬間、一瞬で口吻状に変化させた。

「な！？ ああふツ、んんっ、こ、今度はなにが、ああンン」

その姿は、まるでイソギンチャクじみている。

口から小指大の小触手を無数に生やし、粘液を垂らす。ポタリポタリ芯が入り始めた若いグミの尖りに滴る汁は、新鮮な精液に勝るとも劣らない生臭を放ち、張り合えるほど粘いとろみで糸を引いている。

小触手がそれぞれでたらめに蠢く姿は、気色が悪くて堪らないのだが、連玉型触手が押しつけてくるバイブレーション快感が悪感情をすぐに霧散させ、嫌悪感を持続させない。

「これは、んっああっ……まさか……っ……！ ああいや……きてはなりません」

嫌な予感に背中を押されて思わず叫ぶが、乳首の直上にあった触手の口吻は、ゆっくり降りてきて、

ブヂュ~~~~~！

「い、いやああンン~~~~~！」

いやいやと首を振る王妃の両の乳首に、二匹の触手が吸い付いた。無数の小触手は乳輪に沿って根を下ろす風に、ぴっちり粘り着く。

内部の粘膜で乳首に噛みつく、外見からは想像のつかない吸引力と膂力を発揮した。危なげなく上空に引つ張っていく。

「だ、だめですっ……胸が……オッパイが伸びてしまいます……！」  
汗みずくになりながら紅潮していた肉メロンが、縦長の紡錘形に変えられていく。恥ずかしいほど伸びきる乳房。

上に伸ばされる根本の乳肌にはジンジン熱い快感が生じ、粘膜のヌメらかさで咀嚼される乳首からも鮮烈な快感電流が迸る。

丸い曲線を描く上乳は、すぐ目の前で青筋を浮かせ、心臓にまで響いてくる脈動を繰り返す。乳首は快感を糧にパンパンに膨れ、感度を増し、触手の口吻が肉尖をすりつぶす風にもごもご動く度に、背中が跳ね、乳房全体も粘く振幅してしまふ。

ブルンッ！ ブルブルブルブル！

「んはあああッ！ んんっ……はあ、はああ、そ、それは、ンン、ひ、ひいッッッ！」  
乳首に噛みつく触手は身体を大きく揺らし、乳房を揺すぶってくる。

伸ばされる根本に溜まっていた熱い快感は頭を白ませる悦びに化け、乳房の内部も煮立った鍋のように熱くなっていく。乳肌の赤らみが熟したトマトのように濃くなり始めた。触手に揺すぶられる乳悦は、連玉触手から甘すぎる振動悦楽を受け取り続ける膣内も堪らなくさせる。新しい恥汁が股間から溢れ、シーツをなま温かくしていた。

いやらしいイソギンチャク触手で乳首を揉み潰されながら、根本から肉メロンを揺すぶ

られる快美。真珠の化け物じみた触手に膺を広げられつつ、ヒダの芯までシエイクされる悦楽。双方の快感は身体の中で反響、増幅している。

「ああンツ、お、オツパイも、あふツ、あ、アソコもあつ、こ、こんなのため、ですわつ、わたくし、お、おかしくなる……ンンああつ、ああン……！」

あられもない喘ぎ声かとまらない。よがり声と言ってもいいだろう。王妃の日常は元より、夫にさえ聞かせたことのない余裕のない嬌声が、彼と愛を確かめあう寝室に響きわたる。

身体からはさらに力が抜けていき、心地よい浮遊感に襲われる。夫との情交でも身体がこのような状態になることはあるが、今の相手は触手。心を許していないのに喘がされる悔しさと、伴侶以外に快感を覚えてしまう罪悪感で、胸はチクチク痛む。

「はあっ、ああ……こ、これは……ンンツ、このお汁は……はあンン……ツ」  
何度も揺すぶられている内に、触手の口から汁が垂れてきた。

まるで精液のように白く、強烈に生臭い、ドロリとした汁。

（んん……この匂い……ああ、いやらしい匂いですわ……だめ、こんな時に嗅がされたら……ああ、いやらしい気持ちになってしまつて……ああ……）

乳房の頂上から蜂蜜を垂らされている風に垂れていく触手汁。

夫も大好きで、彼だけのものであるはずの胸に、化け物の体液が染み込んでいく。じわじわ穢されているとはわかる。

しかし、ザーメンのような見た目と匂いが正常な感覚を狂わせているのか、乳肌汁が染み込み、汚れていくと意識すると、壊れた風に弾む心臓に妖しい寒気が下りてくる。触手陵辱の悔しさと罪悪感があやふやになってきた。

（こんな感覚初めてですわ……ああ、胸がドキドキするのに、ゾクゾクしてきて……わたし、おかしいですわ……あふうあん……！）

明確に痛苦とは断言できず、しかも感覚が嫌とも思えなくなってくる。

触手に感じさせられる快感が際立ってきていた。悪感情が奇妙な作用をしているせいか、愛する夫との穏やかな愛の確かめあいでは感じたことのない快美に変貌し始め、病みつきになりそうな中毒性も感じさせる。

（頭がおかしくなりますわ……アソコだけでなく乳首もオツパイも……心も……ああ、い、いけませんわ、このままでは……拒絶しないと……流されては、わたくしがへんになってしまう……ンンッ）

思っても、具体的にどうすればいいかわからなかった。

白む頭を働かせても、初めて味わう快感に抗うすべは思いつかない。

「い、いやですわ、ああアツ、こんなの、お、おやめなさいいッ……んひいんッー」

ブルブル震える連玉型触手は、リズムカルにいやらしい抽送を繰り返してくる。

口を出した触手は乳首に噛みつき、はみながら、紡錘形にした豊胸を芯から揺する。

もっ、身体全体が熱かった。身体中が気持ちいい。

(んっんう！ だめ、ですわっ、ああ、防げませんっ……………もう、無理、ですの……………わたくしの身体、逆らえませんの……………？ はああ、アソコも、オツパイも疼いて、もっと気持ちよくなりたいと……………諦めて陵辱されたいと、思っていますの……………?)  
責められれば責められるほどムラムラ欲望が湧いてきて、このまま身を委ねてしまいました  
いといふしだらな願望が頭をもたげる。

(いけませんわッ！ わたくしはバロン様の妻……………触手などに屈服するわけには……………んふあ、くう、うつつ……………!)

「泣き所を同時に責められると、流石にどうしようもないか……………クク……………このままイクといい……………王と夫婦の営みを行うベッドで触手に犯され、快楽の中で果てるのだ」

(い、イク……………わたくしが果てる？……………あ、ああ、ダメです……………それだけは……………!)

イクという言葉は夫が度々口走るの、意味はすぐにわかった。  
ゾツとする。

例え触手であろうとも、愛する王以外のものの手で果てるなど、裏切り行為に他ならぬ。大臣の血で産み出されたという言葉が真実ならば、憎むべき男に絶頂させられることにもなる。

それになにしろ相手は化け物。女としても王妃としても、尊厳は地に落ちるといふもの。モンスターに犯されて、女の悦びをたっぷり味わったなど知られようものなら、どんな者にも白い目で見られるのに違いない。

触手に絶頂させられることだけは、なんとしても避けなければ。そう思い、奥歯をかみしめる。

「んんっ……くっ……うむう……んんっ……んふうああっっ！　だ、だめえ、こ、声漏れて……うっうッん」

黙ってはいられなかった。

耐えようとするや否や、乳首の咀嚼も、乳房の揺すぶりも、抽送も勢いと速度を増した。紡錘形にされた肉メロンの汗がそこかしこに飛び散って、シートに塩辛い染みを作る。甘酸っぱい汁を漏らす股間は上下にカクカク弾まされ、膝の間の大きな隙間にまで恥蜜の滴が飛んでいく。

「え……あ、い、いやっ！　大きく……膨らんでいる、んああッ、うっッ、んん、わたくしの、膣の中っ、なかでえ、そんな、しょ触手が……ああ、だめですッ！」  
女壺を引っ掻き回し、子宮口に悦楽刺激を送り続けていた触手が、ググツと体積を増させている。

王との幸福感一杯の膣内射精を知る身には、何を意味しているのか察しがついた。

「う、んんッ、ま、まさか……射精するのですか……ああ、はあ、ふうんッ、わ、わたくしの膣に……！」

「そうだ。王だけのお前のマンコを、触手精液でたっぷり穢してやる……たんまり悦ばせてもらったんだ、お返しに触手も絶頂させてやれ……まあ、孕む可能性はないから安心す

るんだな」

「安心なんてできるはずは……ああ、イヤッ！ 大きくなるのが止まらないっ！ ビクビク震えて……ああっ、お、奥にこないでっ、ンああああッ！」

触手は膣の奥深くで射精するつもりらしい。

丸っこい先端をグリグリ押しつける風に突いてくる。

膣口を拡張させている玉部が一際大きく膨らんでいるので、抜け落ちることはないだろう。例え自分から腰を振っても、決して外れはしない。そう思わせるほど、肉に食い込んで抜けない栓と化している。

（果てるだけでなく、あふああ、膣内射精まで、される……ああ、いやですっ、そんなのいやですわっ！）

例え触手の子供を孕まなくとも、夫と快楽を分かち合い、子作りをし、妊娠した子が降りてくる器官を、触手の汁で穢されていいわけがない。

しかもここは夫とも交わう夫婦の神聖なベッドの上。そこで化け物との思い出を作るわけにはいかない。

「そら出すぞ？ 触手の精液は人間と同じだ。熱さも、粘度も、匂いもな……そう、貴様の胸を穢す汁と同じなのだよ……気持ちいいぞ？ 存分に注がれるといい」

「い、いやあっ……は、離れて、ンッああっ、んふうっ、離れなさいッ、あふあッ……はあ、はあ、はあ、わたくしの膣は、お前が射精していいところでは、ああンッ、射精

していいのはわたくしの愛するバロン様だけです、ひいアア！」

四肢を縛られているにもかかわらず、ソニアは腰をカクカク上下に振り、股間の触手を振り払おうとする。無駄だとはわかっていても、やらずにはいられなかった。

触手の形に丸く広がり、恥蜜で照り光る秘裂から、甘酸っぱい滴が飛び散る。

豊満な尻が持ち上がっては下がり、王妃の発情汁をたっぷり吸ったシートと濡れた打擲音を響かせる。

ビクッ……ビクビクッ……ビクビクビクビク……！

しかし、ガツチリ食らいついている触手はやはりビクともしない。それどころか、射精予兆のおぞましいビクつきを繰り返していた。

王妃の抵抗などお構いなしに絶頂へ至り、汚い体液を撒き散らそうとしている。

「なんだ？ 堪らなくなつて自分から腰を振っているのか？ 夫がいる王妃だというのに、犯す触手に迎え腰を打つなど、本当に淫乱な女だな、貴様は」

「ち、違います、わたくしは触手とのセックスなど望んではおりませんわっ、ンンあああ、あ、は、離れないっ、ひいッぐッ！ ああっ……ビクビク震えないで、あ、ああああ……

…わたくしをイかせないでえ、中に出しては、ううっンン……！」

王妃の抵抗をものともしない触手は、その球面の先端を子宮口を押し上げる風に押しつけてきて、けたたましい振動を繰り返す。丸い瘤の内部から起こっている射精寸前の脈動も一緒になつて臆どころか子宮さえも激しく揺すぶり、

ビュグググ！ ビュルル！ ビュルルルル！

「いやああああアアア~~~~~!」

無駄な抵抗をしていた王妃の身体が、ブリッジした状態で硬直した。

膣内で炸裂したとろみの強いお湯の奔流が、腰をゆっくり重くしていく。

もう数回抽送されたら危なかったが、ソニアは何とか、達することは免れた。

しかし、触手は我が物顔で思い切り射精してくる。押す風に密着している肉端は、少し

も離れることなく汚液を吐き出しいる。

熱い汁は、王妃の子宮口を自分の汁で埋め尽くす。逆流すると、自身と密着する膣ヒダ

に染み込み、灼いていく。

射精する振動を刻みながら。

ドビュツ……ビュブルウ……ドグツ、ドグツ……。

「は、はあんあつ……あうん……な、中で、出ていますわ、んひいん……

あああ、ま、また震えて……うふうんっ、まだ出てきますの……？ あううふあああ、う

んんっ……」

精液を吐き出す夫のペニスの揺れも雄々しいが、振動を得意とする触手の方が勝っていた。股間の裏側を揺すぶられながら濁液をそそぎ込まれていると、どうしても吐き出す吐息が柔らかさの塊になってしまつ。

（あ、ああ……わたくし、注がれていますわ……あの方の……バロン様だけの膣なの



に……触手に……化け物に精液を出されて……中を一杯に穢されて……ああ……)

自分の愛液でたつぷり濡れた連玉型触手との結合部から、ドロツと汁が漏れてきた。熟女と言うよりは若い貴族令嬢のような、ほっそりした汗ばみ太腿の内側に垂れ、会陰を伝い、夫の汗や精液も染み込んだことのあるシーツへ落ちていく。

夫に膣内射精された時にも見る光景だった。その時には、愛する人が自分で快楽を貪った証だと喜べるのだが、今の相手は触手。同じ感情が湧いてくるはずがないのだが。

(はあ……はあ……はあ……どうして、ですの……最低の状況なのに…………わたくしの身体は嫌がっていない……のですか……?)

熱い粘液をたつぷり注入された女壺は、淫らな熱をますます高めている。

触手に摘まれた乳房で生まれる快感が膣の欲望を膨らませ、もっと触手に抽送されたい、新しい精液で満たして欲しいという衝動をかき立てる。

膣ヒダが疼き、うねっていた。気持ちよさそうにビュクビュク汁を吐き出す触手に、快感振動をねだる風に抱きついている。

「馬鹿め。なまじ耐えるから身体の疼きがとれんのだ」

化け物を啜え込む股間が汁濡れしたシーツから浮き上がり、焦れっただそつに痙攣する様子を見ながら、オロボイは冷たく言い放った。

「だが安心しろ。私が満足させてやる」

「満足させる……………え、な、何を……………！」

上半身の大臣服はそのままに、下半身だけ裸になったオロボイが、ベッドによじのぼってきた。

(これは……………すごいペニス、ですわ……………)

年季の入った黒みの広がる肌が、強烈な牡らしさを醸している。鍛え上げた若者のように割れた腹まで反り返った逸物は、貞淑な若妻王妃も圧倒される逸品だった。

女の手では掴みきれない程長い上に、指三本分は太く、自分の膣などはペニスの輪郭通りに押し広げられてしまうだろう。

傘のように開き、竿と大きな段差を作る逆三角の亀頭も凄いと云わざる得ない。毒々しい黒紫色をしているにもかかわらず、

(あの力りの部分に……………中を引つ搔かれたらどうなってしまふのですか……………?)  
と、ついつい場違いな感想が浮かんでしまふ。

見ているだけで膣に淫らな熱が籠もり、ペニスから目を離しがたくなっていく。

夫のペニスも大同小異だが、大臣の逸物にはない妖しい魅力を漂わせている。百戦錬磨の古強者といった雰囲気だろうか。

気に入った女は奪ってでもものにして、愛人を何人も困っている噂が耳を掠める。

「ふ、不埒なっ……………そんなものをわたくしに見せないでください……………！」

露出した下半身の熱気が伝わってくるまで迫ったオロボイの威圧感にハツとして、小さ

く首を振った。だが、悪漢のペニスはどんどん近づき、鼻腔に牡臭さが入ってくる。

「フンツ、私のチンポを凝視した女がよく言う」

ベッドの柱に引つ張られて大股開きになっている股間に割り込んできた。

散々射精した触手は既に脇に退散している。

「今度は私の種を注入してやる」

触手の輪郭通りに冠状に広がり、愛液と精液の温かな和合水をゆっくり垂らす肉孔をみやりながら、カイゼル髭の口元を歪めた。産み出した触手をけしかけ、今も下半身を露わにしているのだから、本気なのだろう。本気で、王の妻を犯そうとしている。

「まずは……私に淫らにおねだりしてもらおうか」

「何を馬鹿な……お断りしますわ……はあはあ……わたくしは犯されているのですよ？」

どうしておねだりしなければならぬのですか」

触手陵辱の影響と、どうしても気になってしまうオロボイのペニスのせいで身体が淫らに昂ぶっているのを抑えながら、断言した。

反骨心を視線に乗せてオロボイの目をじっと見詰め、自分は絶対に軍門にはくだらないということを示して見せる。

確かに自分は発情し、物足りなさ 性感の餓えを感じているが、今夜の惨事の元凶に

おねだりするなど考えられない。

（何をされようとも、屈しはしませんわ……どれほど汚されようとも心だけは）

「私に射精されなければ、一生妊娠できない身体になるとしたらどうだ？」

「なんですって……？」

まったく考えもしなかった言葉に軽く目を見張ると、オロボイはしてやったりという微笑を浮かべ、続けた。

「さっきの触手は私が産み出した魔法生物だと言ったな？ その時に、そういう特性を付与したのだ。刻限は夜が明けるまで。その間に私の精液を注がなければ、もう誰の種も身ごもれなくなると言うわけだ。もっとも、私に中出しされたとしても暫くは誰の種も孕めなくなるが……そういうわけだが、それでもおねだりはできんか、ん？」

「……あなたと言う人は……！」

触手体液が永続的な避妊薬であり、オロボイの精液はその解毒剤ということらしい。

ただ、彼の解毒剤を受け入れても一時的に妊娠できない身体になるということだが。

（言っていることが本当ならばわたくしは……）

妊娠できない身体になれば、世継ぎを宿せない。

子を残せない王妃など周囲が許すはずがない。バロン王の妻になりたい女は掃いて捨てるほどいる。その誰かとオロボイが結託すれば、不妊体質になった自分など簡単に放逐されてしまうだろう。

（バロン様……）

心通わせた愛しい男性と引き離されるなど我慢できるものではない。

そんなことになるなら、いつそ命を絶った方がいい。

けれど、卑怯な男に身を委ねさえすれば、幸福な夫婦生活を守れるのであれば。

(こんな男に抱かれるなど……ましてやおねだりするなど我慢できませんが……それであ  
の方の妻でいられるのであれば……わたくしは……)

下唇を噛みしめ、ロープに引っ張られる両手をグツと握りしめた。

心臓がドクンドクン高鳴っている。

これからすることは、妻として言うてはいけないことを口走ることであり、してはなら  
ない行為に身を任せること。とても平静ではいられなかった。

自覚すればするほど、心音が耳にうるさくなっていく。

「どうする、ソニア。決めるのは貴様だ」

「はあ………はあ………」

葛藤で荒らぐ息を整え、ゴクリと唾を飲み込んだ後、唇を動かす。

固まりかけの石膏にでもなった風に、口元は粘く動かし難かった。

「わたくしに……オロボイの慈悲を………ペニスの情けをください………」

「なんだそれは。それがおねだりと本気で思っているのか？ 人妻の癖に、男に媚びるこ  
と一つできんとは情けない………こう言ってみる」

胸が張り裂けそうな激情を抑え込んでようやく言い終えた哀願の台詞も、オロボイには  
不満だったらしい。

カイゼル髭を揺らめかせながら、驚くべき手本を伝えてきた。

「なんですって………そんなこと………そんな恥知らずなことわたくしは………」

「言えないなら一晩そうしている。私は絶対に縄を解かんぞ。言っておくが、お前のティアラをすり替えた侍女だけでなく、今夜の警護も懐柔済みだ。王が今夜帰らないのは言うまでもないな？ この部屋に来る者など誰もいないぞ」

（あなたは………！）

肌の張った細い太腿の間で膝立ちになり、傲然と腕組みする大臣に憎悪を感じる。

これほど人を憎く思ったことはない。

だが、そんなに憎い人間の歡心を買わなければ、自分は破滅してしまうのだ。

（バロン様お許しください………わたくしはこれから破廉恥なことを言います………いえ、言っただけでなくしてしまいます………ですがわたくしの心はあなたのものなのです………）

夫の優しい微笑みを思い浮かべながら彼に謝罪すると、震える唇に力を込める。

「わたくしのス………スケベなマンコを………どうかオロボーイ様の、夫よりも遅しいオチンポで、埋めてください………たくさん引っ掻き回して………ドビュドビュ精液を注いで………王妃のソニアのドスケベマンコを慰めてくださいませ………」

目線を逸らし、悩ましく眉根を寄せながら最後まで言い切る。

（言ってしまった………わたくしは………なんと破廉恥なことを………）

夫への罪悪感が胸を突くのが苦しかった。

声はかすれ、心臓が不快な早鐘を打っている。

「無理矢理言わされているという雰囲気強いが、まあいいだろう……お望み通りくれてやる」

（わたくしは望んでなど……どうしてあなたの汚いペニスなど欲しがるのですか……）

綺麗に剃毛された肉棒の根本を掴む大臣は、ゆっくり穂先を近づけてくる。

グチュ……。

触手精液と愛液で汚れた秘裂に押し当てると、膝を摺り足させながら埋めてきた。

（は、入ってくる……触手だけでなく……オロボイのペニスまで……）

思い返してみれば、触手はオロボイの血で産み出されたもの。彼の息子に犯された後、父親当人に犯されるようなものかも知れない。そう考えると、自分は親子に陵辱されているとも言える。

汚辱感が押し掛かる中、キノコのような肉の逆三角が、若妻王妃の秘唇を広げる。

ぽってりした肉唇は、牡肉塊の輪郭に沿って左右に広がり、愛液の涎をじゅぶりと漏出させた。夫婦の営みも受け止めたベッドシーツの不貞の染みがまた少し広がっていく。

奸賊大臣の使い込まれた分身は、王だけが触れられる大陰唇と小陰唇を内側に巻き込みながら、膣口をくぐり、奥へ奥へと進入してくる。

「クク……これがソニア王妃のマンコか……若いのに肉厚でいやらしい肉ビラだと思えば、内部も具合がいい……王とのセックスで開発されたのかな？」

べたつく裸の亀頭にも、ドス黒い竿部にも、王妃の蜜ヒダはぴったり重なってくる。

四方八方から分厚い柔肉が押し寄せてくる風な強めの圧迫感、興奮したペニスが勝るとも劣らない熱めの膣肉の体温、心地よい汁のぬめり。挿入を進めているとペニスがカアツと熱くなり、根本から射精欲望がドンドン湧いてくる。

一国の王だけが味わえる肉の秘宝を楽しんでいると思うと、牡の快美は増幅し、ペニスが根本から反り返る。

鉄面皮を保っていたカイゼル髭の『ズルいたち』顔は、満足そうに口角を吊り上げながら、腰を少しずつ進めていく。

「んふっ……………あ、うふ……………あんんっ……………はあっ……………ああ……………」

（あ……………ああ、大きいのが中に……………わたくしのお腹を満たして……………んんっ、い、いまビクンツとお腹に反れて……………はあっ……………）

挿入が深まる度に、×字に伸ばされた手足が、のた打つ風に痙攣する。

いくら大きいと言えど、腹全部を満杯にするほどの体積があるわけではない。

しかし、まさしくその通り、腹の中すべてを埋められたかのような膨満感を覚える。

（それに……………ああ、熱い……………硬くて……………わたくしの膣が擦られて……………！）

肩を揺らしながらする呼吸が、徐々に艶を帯びている。

大臣のペニスの灼熱感と、鉄のような硬度と重さの触感が膣全体に広がり、下腹全体をぼつっつと火照らせる。高いカリと擦れあう膣からはビリビリと快感電気が迸り、もっと強

く引つ搔かれない、何度も何度も擦られたいというふしだらな欲望が沸騰しそうだった。  
(バロン様のペニスでないものが奥まで来た、のに……わたくしの膣が………オロポイ  
とのセックスを望んでいるのですか……？ 嘘です、ああ、お、犯されたいと思うなど  
……そんなはずはありませんわ……っ、ふうんっ！)

最後の仕上げとばかりに、筋張った屈強な太腿を内腿にぶつけられた。ペニスの根本の  
下腹部と、こちらの秘裂の膨らみが一気に距離を詰めて衝突。膣は最奥まで征服されてし  
まう。

「んああああアアア~~~~~!」

重なり合った太腿、股間、亀頭の先に串刺しにされた子宮口から甘すぎる衝撃が迸り、  
頭のとっぺんを突き抜けて行き、思わず長く艶やかに叫ばされていた。

荒々しい挿入完了の鮮烈快美が引いた後には、膣で淫らな疼きが渦巻きだす。

女壺をミッシリ満たす肉棒に搔き回されたいという欲望が、膣だけでなく身体全部の体  
温を上げている。

いつの間にか触手が離れていた乳房は青筋を浮かせ、散々しゃぶられた乳首はピンと女  
勃ちしながら、大風に煽られる旗のように激しく震えていた。

夫にも見せたことのないような派手な発情ぶりを、憎い男は見せ物でも見る風にじっく  
り視姦してくる。悦楽馴れした乳房は、それだけで軽い快感を覚えてしまい、悦びが胸一  
杯に広がっていく。乳悦は膣のもどかしさを加速させ、肉棒啜える股間の肌を淫らにヒク

ヒク震わせている。

肉径に沿って丸く広がった肉花卉と密着する男の股間は、新しい愛液でぐちよぐちよに濡れていた。触手の白い粘液が見えないのは、すっかり洗い流されてしまったからだろう。オロポイに挿入されている快感で出た恥蜜は、それだけ多量だったということか。

「フンツ、犯されているのにこの有様とは……普段は澄ました顔をしているが、本性は淫乱なのではないか？ 貴様は本当にスケベ王妃というわけだ」

ゴツゴツして逞しい男の手のひらで腰骨をガツシリ掴むと、自分の腰を引き始める。ぴったり密着していた蜜ヒダを、ドクドク脈打つ竿で引っ張りながら、高く硬いカリ首で引っ掻いていく。

内側から強く押されているだけに、膣全体が引き抜かれている風な研磨感だった。夫との情事でも、これほど引っ張られる感覚を感じたことはないかも知れない。

そして、苦痛はまったく感じない。内部を引っこ抜かれていく風なのに、蜜のように甘い流動快感を覚える。悦楽のあまり、いつの間にか手のひらがシートを握りしめていた。

「ああっ……んふうっ……アはああああ……ンン、ンツツツ……！」

たおやかな美声は蕩け、裏返った媚声に変わっていた。

夫婦の寝室に、長く尾を引く嬌声が響きわたる。

間に挟まれる上擦った吐息は、聞くだけで男を勃起させる媚薬の艶を帯びていた。

(恥ずかしい声が漏れて……わたくしは……相手はバロン様ではないのに……！)

夫にしか聞かせてはならない声を出した自分に猛烈な羞恥を覚えるが、罪悪感に浸る暇は与えられない。

馴染み始め、肉棒に食い込む風に絡みつくと膣ヒダを引っ張りながら、亀頭が抜ける寸前までペニスを抜いたオロボイは、今度は腰を突きだしてくる。

「はうツ、んんっ、あふう……………こ、今度は奥へめくらられて……………ふうっ、うんんっ……………」のんびりした挿入だけに、膣ヒダの一方所一方所がカリと擦れあう。奥へ引きずられる快感をいちいち感じさせられ、吐息は上擦る一方だった。

身体から力が抜け、ロープに縛られる手足がベッドへと沈み込む。シーツを握る手は自らが刻んだ皺の布の上で開ききり、十指をわななかせている。

噴き出す細かい汗が全身をテラテラ輝かせる。誰が見ても、快感を感じてしまっているのは明らかだった。

「んああッ……………ああんっ……………ああ、はあ……………はあ……………」

(ま、またわたくしは……………ああ、いやっ……………こんな声、出させないでくださいっ) オロボイは同じことを繰り返す。

ゆっくり引き抜いて、ゆっくり入れる。

その度に、あられもない声が飛びだして、身体に籠もる淫熱が上昇。女壺を引っ張られ、擦られる快感に意識が白く切り刻まれる。喘ぎ声を出しているよ、じゅじゅと耳鳴りまでしてきて、自分が犯されているという意識すら霞みだす。

「どんどんマンコから汁が滲むぞ。私のカリで何度掻き出してもまったく枯れることがない……見る、私のチンポを。お前のはしたない汁でヌラヌラだ……シーツもぐしょ濡れ……まったくスケベな王妃様だ。私はお前を犯しているのだぞ？ 私はお前の敵だろうか？ だというのに、これほど気持ちよくなっている……お前を慕う城の者が……国民が知ったら、どんな顔をするだろうな？ バロン王は何を言おうと思う？」

「い、いやです……言わないでください……ン、あふっ、ああ、はあ、はあ……」

「本当に、犯されている自覚があるのか？ なら、どうしてこんなに乳首を勃たせている。苛められて悦ぶ変態なのか、偉大なバロン王の王妃殿は」

尖り乳首の肉メロンの隅々をギラギラした視線で舐めながら、腰を早めてくる。

ズジュツ、ジュブブウ、パアンツ！ ジュズ、ヌジュツ、パアンツ！

足を畳んで尻をつける体勢で、腰骨を握る力を決して緩めないまま、こちらの恥骨を壊すかのように、何度も股間をぶつけてくる。

出ては照り光る姿を見せ、入っては膣全体を擦り上げて、子宮口をズンツと押しってくる  
奸賊ペニス。

ヌチャヌチャグチュグチュ汁気たっぷり抽送音が、王族夫婦のベッド上で響く。

甘酸っぱいというよりは生臭さが濃くなった王妃の愛液は周囲に飛び散っている。自分の下腹もオロボイの下腹も、周囲のシーツも、桶で水をかけられた風にたっぷり濡れていた。こんなに恥汁を生臭くしたことも、飛散させたことも、夫との穏やかなセックスでは

なかつたはずだ。

「あぁっ、ふう、んんんっ、はっ、はぁっ、やぁっ、あぁ、くふうっんん！」

（だめ、ですっ、声が抑えられませんかっ………あぁ、こんな、オロボーイなどのペニスに、犯されているのに………あの方とセックスしているわけではないのに………わたくしのカラダ………どうしてこんなに悦んでしまっていますの………あぁっ！）

子宮まで揺すぶられる激しい責めに感じるのは、目眩く悦び。

相手は間男、夫ではないのだといくら意識しても快感は霧散せず、それどころか、夫相手のセックスでは感じないゾクゾクした妖しい快美が心臓をつついてくる。それは奇妙な心地よさを孕んでいて、癖になりそうな危うさを帯びていた。これまで何度か感じた蠱惑的な背徳快感が、また身体に降りてきている。

激しい腰振りの振動は、乳房をブルンツブルンツと上下に弾ませている。

男の手からもはみ出る肉メロン豊胸は、丸さを保って根本から揺れていた。

小指ほどのサイズに女勃ちしたグミ肉尖が、宙空にピンクの縦線を描くのが恥ずかしくて堪らない。

羞恥と背徳快感が混じり合う興奮が高まり、心地よく意識が白む間隔が短くなってきた頃、オロボーイのペニスもぷっくり膨張し始めた。

「くう、ふうっ、さぁイクぞ………私との不倫セックスでも感じまくる王妃のスケベマンコに………ふう、ふう、私のザーメンをたっぷり注いでやる………そら、おねだりしろ。私に中

出ししてくださいと懇願しろ。オロボイ様……いや、ご主人様と呼んでもらおうかつ」  
冷たい眼差しの鉄面皮は崩れていないが、射精が近づいているだけに、流石のオロボイも息を乱してきている。だが、快感に我を忘れることはなく、破廉恥なおねだりを迫ってきた。

「あんツ、うふうつ、わたくしは、バロン様の妻ですわ、あつ、あつ、そんな、こと言えませんわつ、んくつ」

トロンと眉目さがりかけた赤ら顔で、反駁する。

息を弾ませ、甘ったるく喘ぎながらも、何とか最後まで言い切る。

夫以外の男に膣内射精してほしいなどと、ご主人様などと言えるわけがない。

睨んでやりたいところだが、どうしても眉目に力が入らず、甘噛みする風な視線しか送れないのが情けない。

「んつ、んつ、言わなければ、ここで終わりだ。妊娠できない身体になるがいい」

「あつ、くうつ……な、なんて卑劣な……は、恥を知りなさい、あうンン！」

「おおつ、ふう、夫でない私のチンポで盛大に喘いでいる貴様が言うか……はあ、はあ、お前の若妻王妃マンコは、正直に悦びを露わにしているがな……おっく、私のものをつまそつに食い締めてくるぞ？ はあつ、ん、い、淫乱は淫乱らしく振る舞ったらどうだ」

腰の膂力を利かせた素早い腰振りで膣内を引つ掻きながら、しつこく侮蔑してくる。

こんな男の言いなりにならなければならないのは悔しいが、不妊体質になるわけにはい

かない。

(バロン様……あッ、も、申し訳ありません………あぁ、はぁ、許して……)

思い浮かべた偉大な夫……オロボイなど足下にも及ばない素晴らしい男性に向かって謝りながら、目から力を抜く。

「ご……ご主人様の精液……はぁ、はぁ、んっ……わ、わたくしのスケベマンコにたっぷり注いでください……あぁ、んっ……」

「いいだろう、そら、はぁはぁ、貴様もイクがいい……私と一緒にイクんだ、オオっ」

オロボイは亀頭を子宮口に密着させると、ストロークを短くしてきた。その分腰振りは鋭くなり、ほとんどひっきりなしに恥骨が叩かれだし、骨を包む柔肉同士がぶつかり合う柔らかな快美が股間一杯に広がっていく。

(そんな……それは……一緒に達するなど……いやです！)

愛する夫と同時に絶頂する時は、これ以上ないという位に幸せな気持ちになる。

女の獣性を剥き出しにするはしたない瞬間だが、自分にとっては大切な一時。

心を許した夫とだけ分かち合う至福の刹那。

なのに、オロボイなどと共に昇り詰めてしまうのは、その大事なものを穢してしまうことに他ならない。

夫への義理もある。

触手に犯され膣内射精されただけでなく、今度はオロボイにも犯され、拳げ匂に同時に

高みに至るなど、不貞にもほどがあるというものだ。例え自分が望んでいなくとも免罪理由にはならない。

「そらイクぞ……お前の、スケベ王妃様のマンコを、ご主人様のザーメンで穢し尽くしてくれる!」

「ああッ、んっく、ふうっッ、んん、あああ、うひいんん!」

(だ、ダメッ! カラダが、熱くなって、ああ、達してしまっ! いやですのに、このままでは、ほ、本当に、オロボイと一緒にイカされてしまいますわ!)

何度も言われることで学習した卑語を、胸中で無意識に叫ぶソニア。

それだけは避けようと精神を集中して快感の意識を散らそうとするのだが、全身を満たす悦びから逃れられることなど無理だった。

膣内で力強くビクつくペニスに呼応するかのようにつに身体は昂ぶり、今にも意識が溶けてしまっそう。

どんなに頑張っても、自分は間もなく絶頂する。

人妻ならではの洞察力でペニスのビクつき具合を見るに、きつとおぞましい精液を撒き散らされた刺激で上り詰めてしまっに違いない。

「いやあ、あうん、い、いきたくないですわ、一緒にイクのはいやですわッ!」

押し掛かる身体を押し返そうにも、自分は×の字。

手足はベッドの柱と繋がれている。

快樂で脱力する身体にむち打つてもがいても、頑丈で太いロープはギシギシ鳴るだけ。まったく千切れる気配を見せない。軋む音も、大の男の体重を受け止めさせられてベッドの鳴き声にかき消され、衣擦れほども聞こえなかった。

「ンン、うひいんン、ああああ、オチンポ大きくなって、ビクビク震えて、だめっ、ですわ、今出されたら……いやですっ、いやです、一緒にイクのなんていやですわッ！ああ、射精しないでください、今射精されたらわたくしはああッ！」

「はあっ、はあっ、今射精されたらイクのか、ん？ ならば、思い切り出してやるっ、そらくぞ、たっぷり出すぞ、だから見せる、貴様のイキ顔を………むおおおおオオオオオオ！」

「いやっ、いやですわ、いやですわ　ンンンンン~~~~~!!」

オロボイの鍛えられた筋力と体重がたっぷりこもった一撃が炸裂した。

男の太腿がほっそりした汁濡れ内腿とバチンと勢いよくぶつかって、股間同士もムニユリとつぶし合う。突き刺さるような勢いで、亀頭の穂先が子宮口に突進してきた。

黒紫色の先端は、ピンク色の若妻王妃媚肉の中でけたたましく震える。

連動する風に、肉竿もブルルツと振幅。灼熱粘液の放出が始まった。

ビュググググ！　ビュルツ！　ドビュルルルルル！

「ンヒイイ！　ああっ、い、いやあっ、い、イクッ！　あああ、イクッ！」

ビクンツ！　ビクビクビク！　ビクククツツツ！

間欠泉の勢いの第一射が子宮口を冠水させた快感が、意識を一気に白ませた。

自分の方にロープをギリリと引っ張りながら、背筋を仰げ反らせる王妃ソニア。

「ッ~~~~~ッ~~~~~ッ!」

膣内に広がる熱さと重さに、目がカツと開かれる。口は每一文字に引き結ばれ、耐える風な形になった。

膣全体が灼かれてしまいそうなネバネバ精液で、子宮口も膣ヒダも穢されていく。

(いやでしたのに……ああ……わ、わたくしは……オロボーイなどと一緒に果てて……ンあああッ……!)

本当に嫌だったのに、一緒にいったと言えるほど、息を合わせた達しぶりだった。

目眩くオーガズムに悔しさを覚え、オロボーイの存在を一瞬忘れた際に、

バチッ、バチイイイッッッ!

「あひいいんんんッ~~~~~ッ!」

スツと直立している背筋と尻を振り子のように揺らしながら、オロボーイはまた腰を打ち付けてきた。一旦引き抜かれた肉棒は、再び子宮口を串刺しにする。

身体全体を揺すぶる衝撃が、股間から頭の上へと駆け抜けていく。

古い精液と愛液が飛散して、犯し犯されるふたりの腹とシーツを汚す。

ビュルッ! ドビュウッ……ドグドグッ……。

膣ヒダと最奥に食い込んでくる勃起ペニスは、反り返って腹側を押しながら、初回に劣

らぬ脈動を行い、新しい精液を撒き散らした。

「ひグッうん！ あふうあんツッ！ あ、ああッ~~~~ッ！」

ソニアの背中も再び仰け反り、夫と愛を確かめあったベッドを軋ませた。高級寝具はそれまで沈黙を守ってきたというのに、愛する夫との情事でも聞いたことのない甲高いギシギシ音を響かせた。

二回目の射精は、白んだ意識を甘く蕩けさせた。意志の強さを映す碧眼が濁り、視線を彷徨わせる。膣の引きつりも引き延ばされた。汁と汗で全面的に照り光る貴族令嬢風の細い太腿が粘り痙攣を起こす。太腿の振動も付加された膣の絶頂痙攣を浴びせられるペニスは、ますますドクドク脈打って、新しい汚液を放出する。

自分が達したことで、自分はますます穢れていく。

（あ、あああ……わたくし……触手だけでなくオロボイの精液も……こんなに受け止めてしまっている……触手だけでなくオロボイとも……不倫をしてしまった………しかし……一緒にイクなど……）

まどろみにも似た心地よい陶酔が意識を満たす最中、鼻梁にツーンとする感覚が生まれ、そして、頬に熱いものが流れる感触。

と、オロボイはゆっくり肉棒を引き抜いた。

膣口からでるや否やペニスは勢いよく反り返り、精液の残滓の糸を引く。

「はあ……はああ……んっふう……ああ………」



「ふう……はあ……私は約束を守る方だからな。念のため、夜が明けるまで相手をしてやる。陰囊が空になるまで、『解毒剤』を注いでやろう……スケベ王妃に相応しい言葉遣いも一緒に教えてやるから感謝するんだな」

熱り立つ牡棒は、まだまだ犯したりないとばかりに大きく震えた。

まだまだ萎える気配はない。鈴口から垂れ続ける白濁の糸は、まるで肉食獣の口から滴る涎に見える。

「わたくしは……まだまだ穢されるの……?」

王妃の呟きに、オロボイは口元を歪ませることで応えるのであった。

この体験版はここまでとなります。続きは製品版でお楽しみ下さいませ。  
ご鑑賞いただき誠にありがとうございました。

「ご挨拶」  
この度は、ご購入くださりまして誠に有難うございます。  
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」  
体験版の挿絵はモノクロですが、製品版はカラーとなっております。  
この他に違いはございません。

一部の体験版は分量が製品版の半分程度です。

「ご注意ください」  
・ P D F 閲覧ソフト (Adobe Reader 7、9 ~ 11 で確認済み)  
によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。  
・ 本製品はフィクションです。個人の範囲でお楽しみ下さい。

挿絵はメーカー様の利用規約に基づいて  
「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」(G. J?様)と、  
「セックスライフ」(G. J?様)  
を利用して作成しました。  
尚、当サークルはG. J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』  
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

「ご意見、ご感想をいただけましたら幸いです」  
(2013年1月末日現在)

- ・ 夜山の休憩所のブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>
- ・ 夜山の休憩所のBlog <http://b.dlsite.net/RG11385/>
- ・ ツイッター <http://twitter.com/kimoriyamasuido>